

小集団指導における知的障害児の運動遂行の促進 ——補助指導者の役割の観点から——

坂上 俊介

I 問題

知的障害児の運動技能の向上や運動習慣の形成は、彼らの生活をより豊かにする。運動技能の向上や運動習慣の形成のためには、学童期の十分な運動の経験が重要である。しかし、知的障害児は、地域や家庭で運動する機会に乏しく、学校での運動の必要性は高い。特別支援学校や支援学級での運動課題は、小集団指導で取り組まれることが多い。小集団指導では、主旨導者（以下、MT）と補助指導者（以下、ST）の役割分担に基づくチームティーチング（以下、TT）が実施されることが多い。TTが効果的に機能するためには、STの役割や位置取りが重要であると考えられる。米持・村中（2011）では、小集団指導の音楽活動において、STの役割や位置取りの設定は、対象児の課題遂行に影響を及ぼすことが示唆されている。この研究では、打楽器演奏や手遊びの音楽課題を取り上げたため、対象児は着席して課題を遂行した。運動課題では、その課題内容に応じて、対象児には多様な動きが求められ、STも対象児の動きに応じた役割や位置取りが求められる。しかし、小集団指導の運動課題においてSTの役割や位置取りの違いが対象児個々の運動遂行に及ぼす影響についての検討は十分でない。また、STの役割や位置取りは、運動課題の特性によっても異なることが推測される。本研究では、知的障害児5名の小集団指導において、内容の異なる複数の運動課題を実施し、STの役割や位置取りが対象児の運動遂行に及ぼす影響を検討した。

II 方法

1 対象児

対象児（participant）は、小学校特別支援学級の1～2学年に在籍する知的障害児5名（P1～P5）とした。P1は1学年のダウン症女児、P2は1学年で知的発達の遅れを示す高機能自閉症男児、P3は

2学年の軽度精神遅滞男児、P4は2学年の知的発達の遅れを示すウエスト症候群女児、P5は1学年の精神遅滞男児であった。P1とP2は、対象児5名の中では、正確に動作模倣することができ、運動遂行レベルも高かった。P3～P5は、体の動きがぎこちなく、バランスも悪かった。P5は、体操中に走り回る、指導者に抱きつく、床に座る反応が認められた。

2 指導場面と指導内容

A大学研究センターのプレールーム（11.9m×11.6m）において、X年5～11月までの約7か月間、週1回のペースで行い、全26回実施した。指導時間は、1回約40分間であった。指導者は3名（MT1名、ST2名）であった。MTは、主に一斉指示を出し、授業を統括する役割を担い、STは、動作モデルの提示、技能補助、逸脱反応の対応などの役割を担当した。

運動課題には、体操、リズム運動、サーキット運動を設定した。体操は、立ち位置から動かさずに指導者の動作を模倣して身体を動かす課題であった。リズム運動は、左回りに繰り返し周回しながら、音楽に合わせていろいろな歩き方や走り方をする運動であった。サーキット運動は、左回りに繰り返し周回しながら平均台渡りや玉入れなどの4種類の課題を行う運動であった。体操、リズム運動、サーキット運動は、課題の内容がそれぞれ異なっていた。

3 運動課題の指導デザインと条件

1) 指導デザイン

各運動課題において、STの役割や位置取りの設定が対象児の運動遂行に及ぼす影響を検討するために、体操は4つ、リズム運動は5つ、サーキット運動は6つのフェイズで指導を構成し、フェイズごとに各条件を導入した。

2) STの役割と位置取りの条件

体操課題は、ST1がP5の側方に位置取り動作モデルを提示する条件(ST1側方・P5個別条件)、P5の前方に位置取り動作モデルを提示する条件(ST1前方・P5個別条件)、P5と次に遂行レベルの低いP3の中間点前方に位置取り2名の対象児に対して動作モデルを示す条件(ST1中間点前方・P3P5条件)、P5とP3の中間点前方に位置取りP5とP3に対して動作モデルを示し、ST2が3番目に遂行レベルの低いP4とP3の中間点前方に位置取り、P4に対して動作モデルを示す条件(ST1ST2中間点前方・P3~P5条件)の4条件で実施した。

リズム運動とサーキット運動は、全対象児を支援対象にコースを周回して動作モデルを示す条件(ST動作モデル提示・P1~P5条件)、全対象児を支援対象にコースの内側に位置取り、言語指示や言語賞賛を与えるが、動作モデルは示さない条件(ST動作モデル提示なし・P1~P5条件)、遂行レベルの低い対象児2名に対して個別に動作モデルを示す条件(ST動作モデル提示・P4P5個別条件とST動作モデル提示・P3P4個別条件)の3条件で実施した。

4 運動課題の評価方法

体操課題では、課題項目ごとの正反応と誤反応を定義し、「正反応数(誤反応数)÷全課題項目数×100(%)」の計算式で正・誤反応率を算出した。正・誤反応率を合わせて遂行率とした。加えて、逸脱反応の割合を評価した。リズム運動では、スキップやサイドステップなどの動きにおける正・誤反応を定義し、10秒の部分インターバル記録法を使用した。対象児の正・誤反応が生じた割合を「8秒以上の正反応(誤反応)が生じたインターバル数/全インターバル数×100(%)」の計算式で算出した。加えて周回の正・誤反応数を評価した。周回の正反応を4本のコーンの外側を左方向に回ること、周回の誤反応を2~3本のコーンの外側を回ることと定義した。サーキット運動では、平均台や玉入れなどの各課題の正・誤反応を定義し、その数を評価した。正・誤反応数を合わせて遂行

数とした。

III 結果

1 体操課題

P1、P2、P3の遂行レベルは、STの役割と位置取りによるフェイズ間の差は認められなかった。図1に、第一体操におけるP4とP5の正・誤反応率を示した。P4の正反応率は、第一体操におけるフェイズ2のST1前方・P5個別条件で、他のフェイズよりも高まった。P4の正反応率は、フェイズ4のST1ST2中間点前方・P3~P5条件で、フェイズ1のST1側方・P5個別条件やフェイズ3のST1中間点前方・P3P5条件よりも微増した。P5の遂行率は、フェイズ1では、ほとんどで0であったが、フェイズ2とフェイズ4で微増した。P5では、フェイズ1とフェイズ2で、逸脱反応の一つである立ち位置を離れる割合が高かったが、フェイズ4では低下した。フェイズ3からフェイズ4にかけて、P5のSTに抱きつく、押す反応の割合が増加した。

2 リズム運動

P3では、フェイズ1とフェイズ3のST動作モデル提示・P1~P5条件で、フェイズ2のST動作モデル提示なし・P1~P5条件やフェイズ4のST動作モデル提示・P4P5個別条件に比べて、周回の

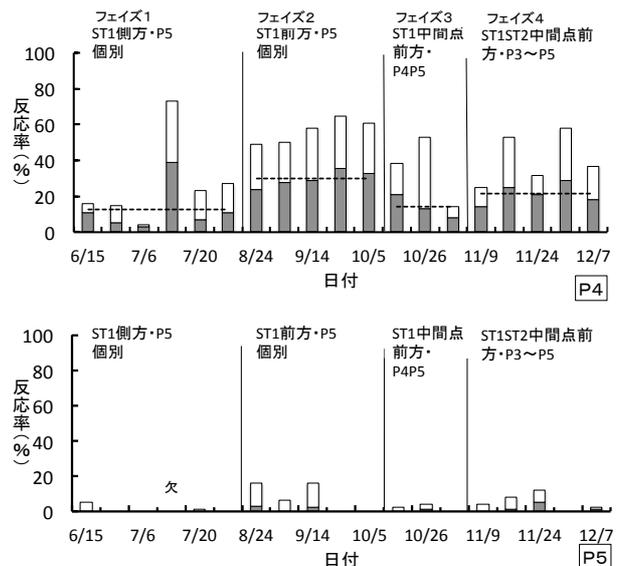


図1 P4とP5の第一体操課題における正・誤反応率

■は正反応率、□は誤反応率を示す。

横線(破線)は、各フェイズ内の平均正反応率を示す。

正反応は微増し、周回の誤反応数は減少した。P4とP5では、フェイズ4のST動作モデル提示・P4P5個別条件で、他のフェイズに比べて遂行の割合が高まった。

3 サークット運動

図2に、サーキット運動におけるP2、P4、P5の正・誤反応数を示した。P2の正反応数は、フェイズ1のST動作モデル提示なし・P1~P5条件の後半で増加したが、フェイズ2のST動作モデル提示・P1~P5条件で減少した。フェイズ3のST動作モデル提示・P1~P5条件で再び増加し、フェイズ4のST動作モデル提示・P4P5個別条件でも高いレベルを維持した。P3の正反応数は、フェイズ間で差が認められなかった。P4とP5では、フェイズ4のST動作モデル提示・P4P5個別条件において、他のフェイズに比べて、P4の遂行数が微

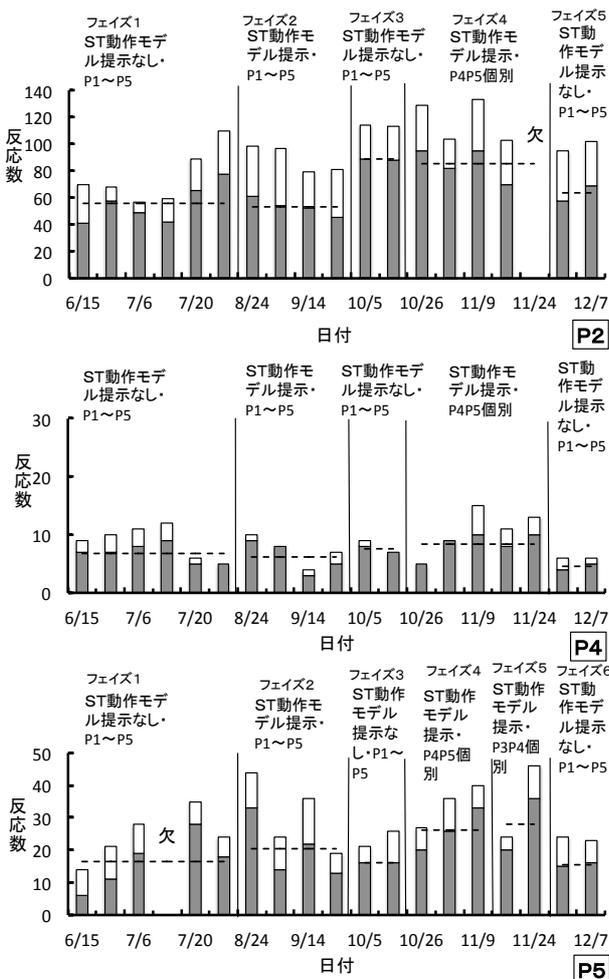


図2 P2・P4・P5 サークット運動課題における正・誤反応数

■は正反応、□は誤反応数を示す。

横線(破線)は、各フェイズ内の正反応数の平均を示す。

増し、P5の遂行数が増加した。

IV 考察

体操課題では、STのP4やP5の前方に位置取り動作モデルを示す役割により、P4の正反応率やP5の遂行率が微増したと考えられる。STがP4やP5の前方から正しい動作モデルを示すことで、動作モデルが遂行反応の生起を促す手がかりとなったと推察される。

本研究では、リズム運動とサーキット運動の両方で、STが全対象児に動作モデルを示す役割を行った。この役割により、リズム運動ではP3の周回の正反応数は微増したが、サーキット運動ではP2の正反応数は減少した。このように、STの全対象児に動作モデルを示す役割の効果は、運動課題の特性により左右されることがあると考えられる。リズム運動は、周回しながら、音楽に合わせてスキップやケンケンパなどの様々な動きを行う内容であった。サーキット運動とは異なり、対象児が周回する動線上に障害となる運動器具は置かれていなかった。そのため、STの動作モデル提示の役割は、P3の周回の正反応を促進しやすかったと考えられる。指導場面では、運動課題の特性に応じて、STの動作モデル提示が対象児の運動遂行へ及ぼす影響が異なることに配慮して、STの動作モデルの提示を行う視点が重要と考えられる。

リズム運動とサーキット運動では、P4とP5だけに支援するSTの役割が、P4とP5の運動遂行を高めたと考えられる。P4とP5の運動遂行は、STによる個別の動作モデル提示や言葉かけ、身体ガイドにより高められたものと推察される。しかし、全対象児に支援するSTの役割では、対象児の運動遂行は十分に高まらなかった。対象児の運動遂行が十分に高まらなかった要因として、P5の逸脱反応や運動課題の難易度など、STの役割と位置取り以外の変数の影響が考えられる。

文献

米持早苗・村中智彦(2011) 小集団指導における広汎性発達障害児の音楽活動への参加促進と指導者の位置取り. 特殊教育学研究, 49, 157-170.